

京都秋期福音特別集會 (3)

聖意体現

——マタイ伝第7章15～29節——

1974年11月17日

小池辰雄

御霊における戦い 電撃電光的にやってくる 落ち葉 まがいの果 我は葡萄の樹 聖意体現
 信仰の呼吸 御意を行う者のみ 愛への自由 天国に入る資格 愛が自然になる いつも空気が
 の中に 十字架という狭き門 キリストの磐 祈り

【マタイ7】

15 偽^{にせ}預言者に心せよ、羊の扮装^{よそおい}して来^{きた}れども、内は奪^{かす}い掠^{おおかみ}むる豺狼^{おおかみ}なり。
 16 その果^みによりて彼らを知るべし。茨^{いばら}より葡萄^{ぶどう}を、薊^{あざみ}より無花果^{いちじく}をとる者あらんや。17 斯^かく、すべて善^よき樹^きはよき果^みをむすび、悪^{わる}しき樹^きは悪^{わる}しき果^みをむすぶ。18 善^よき樹^きは悪^{わる}しき果^みを結^あぶこと能^{あた}わず、悪^{わる}しき樹^きはよき果^みを結^あぶこと能^{あた}わず。19 すべて善^よき果^みを結^あぶぬ樹^きは、伐^きられて火^かに投げ入れらる。20 然^さらば、その果^みによりて彼らを知るべし。21 我^{むか}に対して主^まよ主^まよという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天^{あま}にいます我が父^{ちち}の御意^{ごい}をおこなう者のみ、之^{これ}に入るべし。22 その日^ひおおくの者、われに對^{むか}いて「主^まよ主^まよ、我^{われ}らは汝^{なんぢ}の名^なによりて預言^{よげん}し、汝^{なんぢ}の名^なによりて悪鬼^{あくま}を逐^おいだし、汝^{なんぢ}の名^なによりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為^なししにあらずや」と言^いわん。23 その時^{とき}われ明白^{あらか}に告^つげん「われ断^{ことわ}えて汝^{なんぢ}らを知らず、不法^{ふぽう}をなす者^{もの}よ、我^{われ}を離^{はな}れされ」と。
 24 さらに凡^{すべ}て我がこれらの言^{ことば}をききて行^いう者を、磐^いの上に家^{いえ}をたてたる慧^{さと}き人に擬^{みな}えん。25 雨^{あめ}ふり流れ漲^{みな}り、風^{かぜ}ふきて其^{その}の家^{いえ}をうてど倒^たれず、これ磐^いの上に建^たてられたる故^{ゆえ}なり。26 すべて我がこれらの言^{ことば}をききて行^いわぬ者を、沙^{すな}の上に家^{いえ}を建^たてたる愚^{おろ}かなる人^{ひと}に擬^{みな}えん。27 雨^{あめ}ふり流れ漲^{みな}り、風^{かぜ}ふきて其^{その}の家^{いえ}をうてば、倒^たれてその顛^た倒^たはなはだし』
 28 イエスこれらの言^{ことば}を語^{かた}りおえ給^{たま}えるとき、群衆^{ぐんしゆ}その教^{おしえ}に驚^{おど}きたり。29 それ
 は学者^{がくしや}らの如^{ごと}くならず、権威^{けんい}ある者のごとく教^{おしえ}え給^{たま}える故^{ゆえ}なり。

●御霊における戦い

キリストも私たちのことを「友」と呼んでくださる。このイエスをこのようにして直^{じか}々に受けとつている世界というものは、この群^{ぐん}が何人^{なんにん}に滅^{めつ}ろうが、あるいは何人^{なんにん}に増^{ぞう}そうが、



群の数の増減にかかわらず、必ず勝ちます。神の国の勝利をいただきつつ進んで行く。こんな確かなことはない。普通、教会というのはいろいろなことを心配するけれども、我々は何も心配はいらん。万一、私は独りになっても進んで行きます。

ダンテの『神曲』の「天国篇」の中に、

「未だかつて教会が産んだ子の中でこれほど戦闘的な子はない」

という言葉があります。ダンテは一人一教会のような人物であった。当時のローマンカトリックの世界にあつて、あの『神曲』一篇を、心血を注ぎ流竄るざんの生活19年を貫いて、世に投じた。しかも、ダンテは天国篇十三歌以下は、ある壁の中に封じ込めて隠してしまった。もしこれを読まれると、焼き捨てられるから。ローマンカトリックの法王の悪口なんかが出てきますから。ダンテには子供が男の子二人と女の子二人いたわけですが、その男の兄弟の弟の方に、夢の中でお父さんが現れた。

「この街をこう行つた所の二つ目の角を曲がつた所の建物の壁の中に『神曲』の後が隠してある。お前は兄と一緒に取りに行つてこい」

という示しを受けて、行つてみたら、その通りだったと。嘘のような本当の話であります。そういう戦闘的ということ。私たちは、御霊における戦いを使徒たちと同じようにしていなくては。破滅に向かつていくようなこの20世紀において。正直、このまま行つたら、世界はおかしなことにはつきりなる。

いつか、ちょうどこの会館で祈つた時に、U君に示された預言的な文字がある。パウロが天界で嘆いて、

「お前たちは、しっかりと主に連なつていろ。世界も日本も滅びに向かつている。キ

リストは非常に悲しんでおられる。また、羔の怒がくる。深く祈つて行け」

と云うような言葉が来た。切々として波状的に來ている不思議な示しです。私はこれは宝の如くに思っています。

そういうことで、私たちは勝利の戦いを、

「我すでに世に勝てり。汝ら雄々しかれ」

というので、進んで参ります。御霊における権威を使徒たちは持つていた。どうぞ、私たちもそのように御霊における権威を持つていく。御霊におけるキリストの義とキリストの愛は、これは離すことができない。これをいただいて、進んで行くわけです。

●電撃電光的にやってくる

ヒルテイーが『眠られぬ夜のために』の10月31日の項に——10月31日は宗教改革記念日です。1517年の10月31日にマルチン・ルターは、あのけしからん免罪符に対して九十五ヶ条をヴィッテンベルクの城教会の門扉にラテン語で掲げた。あれはルターは喧嘩をしようと思つたのではなく、学問的に



「これは真理を問う」

と言つて掲げたのが、宗教改革の口火になったのですが——その10月31日のところに、ヒルテイーがこういうことを書いています。ルカ伝11章36節を引用して、

「もし汝の全身明るくして暗き所なくば、輝ける灯火ともしびに照らさるる如く、その

身全く明るからん」(ルカ11・36)

「わたしたちの内心に起こるもつともよい、もつとも決定的なものは、概していつも電光的性質をもっている。

御霊のバプテスマというものは、そういった電撃的、電光的にやってくる。ダマスコ途上のパウロがもつとも激しくはつきりと、そのことをキリストにやられた。もちろん、慈雨が沁みとおるようを受けていく場合もあります。けれども、いつか本当に或る一つの決定的なことが皆さんの中に起きて——かつて起きただろうし、これからも起きるだろうし——はつきりその体験をすると、正直、或る一つの人生の峠を乗り越えたことを体験せしめられる。

すなわちそれは別の世界からの

即ち、絶対界からやってくるところの、

恩恵のひらめきであり、光明の輝きである。おおかたそれはたんに一つの見通しであるばかりでなく、同時にまた積極的行動を起こす刺激である。

これを受けると、積極的行動へのバネとなっていくのだということです。信仰の事態もそのように、信というのは行にならざるをえない。実は、受けとることはもつとも激しい行である。

「全存在でもつてキリストを受けとる」

ということとは、内的なもつとも激しい行であつて、それが自ずから外的な行為にも派生していく。いわゆる

「信仰と行為」

なんて分けて考えることはいらん。全的に受けとるということとは、いつもそういう角度です。すべて、分裂のない、一如という性格のものである。ヒルテイーみたいになちよつとおとなしい人も非常にそういった内的なキツパリとした断然たるものをもつて、やはり語っております。

そこで、この決意を同様にすみやかにつかみ、そしてそれをただちに遂行するのは人間にゆだねられた仕事である。そうでなければせつかくの恩恵のまなごしは過ぎ去つてしまふ。しかしわたしたちがこの決意をつかんだならば、この決意は金色てんじきの翼ある鷲わしであつて、ふつうは越えあたわぬ障害をも越えて、わたしたちをたくましく高揚させる。神の国(天国)への道はまさにまったく独特のものであつて、学習のふつうの規則ではなかなか測りがたいみちなのである。けれどもこれを経験したことのないひと



は、これを信じようともしないのである。」
 それから、この文章の後に「落ち葉」という詩があるので、紹介しておきます。

●落ち葉

「深みゆく秋、山また谷をさすうらえば、
 べにぞめの木の葉の落ちゆく。」

鳥の歌たえて聞こえず、
 この森宿のいずこにも。

霜と雪とはやがて包まん
 あやをなす錦の森を。

いかなれば嘆きなくこのたび汝れはいつ、
 「秋の暮れ、なごかくはおそくきたりし」と。

もとのわが身にわれは敵となりぬ。
 わが身はずでに明け渡されたり。

いまや来ぬ、真剣の友なる死、
 死ののちにいのちは来たる。

なんじの意志はわが意志となり、不安は平安に。
 たましひは安らいをえぬ。

解かれしはここに結ばれ、うせたるは見いだされたり。
 いのちのいぶきにわれ生かされぬ。」

自分自身の存在に対して私は敵となった。生まれつきの我、本来の存在というものはもう預けられてしまった。お返しして、預けてしまった。いまや死がやってきた。しかし、その後で本当の生命がきたと。晩秋の落ち葉を見ながら、そういつたことをヒルティ―は瞑想したわけです。汝の意志はわが意志となった。今までの不安のあとに、実に平安が、平静がやってきた。魂は全くこの平安の中に入ってきた。何か今まで囚われていたものが全部解き放たれ、そして、何か欠けていたものが本当に見いだされた。本当の生命の息吹が私につきささって来た。これは聖霊のことです。

●まがいの果

それではマタイ伝に入ります。

15 偽預言者に心せよ、羊の扮装して来れども、内は奪い掠むる豺狼なり。

16 その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。

ところが、偽預言者を果でもって知ろうすると、時々間違える。キリストはこう仰つてい



るけれども。というのは、その後の方を見てご覧なさい。

22 その日おおくの者、われに對^{むか}いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為^なししにあらざや」と言わん。23 その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

とある。結果を見ると、凄いですよ。預言をしたり、悪鬼を追い出したり、多くの力ある業をしたから、その果を見て、

「あれらは素晴らしいなあ」

と。ところが、どっこい、キリストは

「これは違った果だ」

と。その果でもつてばかされる、なということですよ。父の御意を行ってないで、キリストの名を借りて業をするやつがある。サタンというのはとんでもないやつですから、これは気をつけなくてはいいかん。だから、果を見て、

「これはいい」

なんて思うと、どっこい

「これはサタンの業だった」

ということになるわけですから。そこらも、手放してもつて、すぐというわけにはいかないらしい。

17 斯^かく、すべて善^よき樹^きはよ^みき果^みをむすび、

これはもうはつきりしている。善^よき樹^きは必ず善^よき果^みを結ぶ。

悪^{わる}しき樹^きは悪^{わる}しき果^みをむすぶ。

これもはつきりしている。ところが、悪^{わる}しき樹^きが善^よき^らし^き果^みを結ぶやつがあるから、まがいの果を結ぶ樹があるから、そいつは気をつけろ。しかし、それはまがいであって、やはり悪^{わる}しき樹^きなんです。本当に善^よきものは必ず善^よき果^みを結ぶ。因果応報だから、これは法則の世界で、その通りです。

だから、今の20世紀の文化文明は決して善^よき樹^きから成っているところの花や果ではありません。見ていると、なかなかいい。ところが、これはまがいなんです。

● 我は葡萄の樹

善^よき樹^きは即ちキリストなんだ。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

という。

「葡萄の樹はそこらにあるけれども、しかし、本当の葡萄の樹は私だよ。あそこに
ある葡萄の樹は私の一つの象徴だよ」



と。これは逆なんだ。イエス・キリストが本当の葡萄の樹で、イエス・キリストとこれに連なる者をもし例えていうならば、あそこにある葡萄の樹みたいなものだ。

そのように、善き樹、善き幹に結んで連なっていれば、私たちは本当に善き果を結ぶ。キリストの霊を止めていける者を「霊止」という。キリストの霊を止めていけば、これが幹に連なっているところの「霊止」であります。あなた方は、「ひと」という字を書くときに、こんな簡単な字（「人」）を書かない方がいい。これ（霊止）を書かなくては。

信ずるとは、そのように連なっている世界です。そして、同じものが私たちの中に止まっている世界です。内住の関係、内在の関係。内なる関係のないものはみな本ものにならない。

「凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの中に在したもう。」（エペソ4:6）

とある。

「神は万ずのものに超絶しており、万ずのものを貫き、万ずのものの中にいたもう」

と、パウロがエペソ書で言っている通りです。クリスチャンというのは、その事態が本ものにならないかぎりには、いつまでたつてもしょうがない。それは常に祈りにおいて連なることです。

● 聖意体現

そして、本当に連なったら、必ず行為に、神の栄光として現れる行為に、自ずから現れる。ルターが『ロマ書の序文』の中で言っている、あの有名な言葉がある。

「信仰とは、神を受けとると、思いも考えも心も全部、何か別なものに、旧きアダムが殺されて別なものに甦えらされる。そして、聖霊がやってくる。善き業をしようかと
思わないうちに、もう既に善き業はできてしまっている」

なんていうようなことを言っている。ルターがあそこで言っている言葉は素晴らしい。信仰と行為がピタリ一つ。私は、その信仰すらも、受けとるところの内的行為、と言いたい。親鸞の歎異抄にあるような、弥陀の本願の劫力がかかってくるところの事態です。

18 善き樹は悪しき果を結ぶこと能わず、悪しき樹はよき果を結ぶこと能わず。
19 すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。

偽りの、キリストに連ならないところの樹も枝もみな、これは最後の審判でお終いだ。

20 然らば、その果によりて彼らを知るべし。21 我に対して主よ主よという者、
ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、
之に入るべし。

この21節です。これを「聖意体現」と題したわけです。天国への資格はどういうものかという、



「どうぞ、あなたの御意を成してください」
と言って提身したキリストと同じ質の生き方を、

「主さま、どうぞ、私を捕まえて私を通して、言いまた成してください」
と言って、いつも主に連なつて、主の御意をいただいて行く。

「御意をいただく」
と言うと、何か「思う世界」かと思うかもしれないが、そうではない。受けとつて、直ちにそれが行為に発する。信じ従うこと。

「はいっ」
と言って受けとつて、それに従つていく世界。信従していく世界です。

●信仰の呼吸

これも二本ではない。結局、「信のみ」と言つたつていい。その「信」という字が、神の「言」なるキリストが「人」となるという。今度は、キリストが私たちの中に人となる。聖言が私たちの中に化体する。聖言は霊ですから、

「わが言は霊なり、生命なり」

ですから、キリストという言、キリストから発生している言は直ちに力を持つている。霊言であるから。これを受けとることがもう内的に、じつとしていても、これは静中の動という事態です。受けとつているときはまだ静だよ。けれども、その中にもう既に動的なものが来ているから、動中の静という。動いていても、そこに静かなものがある。静動一如という事態です。この静動一如というようになつたら、正直、くたびれなくなるんです。

泳ぎもそうです。ストロークして、グーツと伸びているときに、全身を波に任せてしまう。波がくるから首を上げようとしたら、くたびれてしまう。それではダメです。完全に潜水艦みたいに、波に任せてしまう。人間の身体は浮くようにできているんだから。波に任せると、その瞬間に休まる。そうすると、その次のストロークが楽に出てくる。それだから、くたびれない。私みたいなやつが、なぜ泳ぎがうまいかという、その信仰の呼吸を知っているからです。

何をやつたつて、この信仰の呼吸でいけばいい。バットを振れば、またそれも違つてくる。ピッチングでも、何でも。坂を上るときも。体育の先生が私と一緒に坂を上つて、びっくりしてしまふ。向こうは少し、ハアハア言つているんだ。すべて、何をするにも、信仰の呼吸なんです。スタートラインに立つと、私は目が開いていたつて、祈っているんだから。そうすると、足が軽くなつてしまふ。霊肉一如で、すべて全的であります。

「全人教育」なんて言うけれども、そんなことを言わなくなつて、私は全人教育なんです。全人的なことが好きだったのがゲートです。



「主よ、私をどうぞお使いください」

と言つて提身していると、私心がなくなつてくると、そのときに為すべきことが、チラツと——その聞き方はある人はまるで本当に人がものを言っているのを聞くように聞くひともあるよ、私はそんな角度ではないけれども——ひらめきで来る。不思議なんだよね、コーヒーを飲んでいたつてパツとくるからね、今度は何をしゃべろうかと。

●御意を行う者のみ

天国は実存を通る。この世の地上における実存を。

「父の御意を行う者のみ之に入るべし」

というと、

「では、キリスト教を知らない人はどうなるか」

なんて、すぐそういうバカらしいことを考える。天国に誰が入るかは、誰も知らん。人が人を決して品定めできない。キリストの「キ」の字も知らないのが天国へ行く。キリスト教の著作をする人が、

「どつこい、待て！」

なんて言われたり。まあ、いろいろなことです。天国にはどういう人が行っているかは、これは本当に神のみ定めたもう。神のみがその人の全存在を受けとつて、どう判断なさるかということ、これは神さまの秘密の世界で、人間の側には全然わからない。十字架上の片一方の盗賊はさんざん悪いことをして、最後の瞬間に悔い改めた。そうしたら、キリストに

「お前は今日、私と一緒に天国だ」

と言われた。

「ずいぶん不公平だな」

と思うかも知れない。

「では、俺はさんざん悪いことしておいて、最後に悔改めようか」

なんて。そうはいかん。神の国というものは、本当に厳かな神の判断にだけ任せられているところであると思います。仏教徒であろうと、ファイファイ教徒であろうと。ただし、存在的に神に逆らっているやつは、これはどうにもならんでしよう。

マタイ伝の終り方に、御意を行うことのひとつの大事なサンプルが出ている。25章31節から、

「31人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位

に坐せん。32斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと

牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33羊をその右に、山羊をその左におかん。

34爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて



世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。³⁵ なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、³⁶ 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、³⁷ 獄に在りしときに来りたればなり」³⁷ 爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。³⁸ 何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。³⁹ 何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」

「そんな覚えがありません」と言ったら、

⁴⁰ 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」(マタイ25・31～40)

と。究極のことは愛の問題です。愛のないひとは、これは天国に入れないでしょうね。愛するとは人を助けることである。感情的に愛することではない。人助けをし、人を救い、自分が僕となり、縁の下の力となる。迫害されても、キリストは十字架上で

「彼らを救してやってください」

と言われた。これは愛の極みです。

●愛への自由

今、東京なんかに住んでいるとなおさら分かる。どうも、人の顔を見ていると、とげとげしくてしょうがない。本当に電車の中でニコニコしている人をあんまり見ない。ぶつかっても、

「なに、ぶつかるか」

なんていう顔してね、

「どうもすみません」

なんて言うのはいやしない。学校でも、校長さんが歩いていても、

「何が歩いてるか知らん」

というような顔している。私たちは学生時代に、大学の先生がいらつしやれば、たとえ教わってなくなつたつて、軽く挨拶したものです。中学校時代は上級生に対しては、知ると知らないにかかわらず、おじぎをしたものです。おおよそ、人間的な親しみとか交わりとか、いい意味における秩序とかいうものがなくて、悪平等になつている。これが

「自由だ、平等だ」

とか言うけれども、大間違いだ。神さまの前には、大臣も乞食も平等ですよ。けれども、人間の世界にはちゃんと秩序がある。

自由とは、キリストにあつては何びとも属さない。キリスト直結の世界では、一人びとりが絶対的な自由をもっている。ということとは、これは

「愛への自由」



なんです。奉仕への自由なんです。だから、ルターが言っているとおりに、

「キリスト者は自主のものにして、何びとにも属しない。けれども、キリスト者はまた、
奴隷なる者にして、一切のものに属する」

と言う。そういう矛盾した二つの命題はどういうところから来ているかというところ、神の、キリストの僕となるところは、相手は絶対者だから、何ものにも属しないという自由をもっている。キリストと共に僕となつて、本当に人を助け救つていくという愛をもっている。この自由と愛とは離すことができない。

そういう意味の自由というものを、今の人は知らんものね、先生方にしても。これではどうしても、しょうがないですよ。この「民主主義」なんていう言葉は大間違い。神ぬぎのデモクラシーなんて。リンカーンはそんなことを言ったかと言うんだ。ルターにしろ、リンカーンにしろ、グラッドストーンにしろ、みなそういう福音的な角度です。フリードリッヒ大王にしたつてそうですよ。日本では、どうしても、道德の奥にそういう高次な宗教をもつてこなければ、いつまでたつても始まらないです。

だから、文部大臣は、そういう偉大な魂が文部大臣となり、文部省というのは政治から超越していなければダメです、グルグル、文部大臣が変わつたりなんかして。超政治の、超イデオロギーの世界を文部省が持つようになれば、これは本当の百年の計がなってくる。イデオロギーを何もただけなすのではない。イデオロギーにはそれぞれの真理性がある。ただ、それを総括するところのものは、超イデオロギーのものを持つていなければなりません。

そういう意味において、どうしても、そのような真理のためには、あなた方若い人たちは戦つていただきたい。著述でもいいし、何でもいいですから。

●天国に入る資格

父の御意を、キリストの御意をなしていく。人生の目的はここに極まる。聖意体現です。天国に入る資格は、そのように本当に生きようとしていたかということ。

「俺はダメなんで、もうしょうがない」

と言うけれども、その心をもって祈り生きていたならば、どんなにそれが破れ器であろうとも、それは天国に行きます。ところが、見せかけは実に立派で、果は大変立派である。けれども、神の心を求めていないで、自己の名誉を求めたり、自己の側を求めた者は、どんなに立派なものでも、

「ちよつと、待て」

と言われる。これは天国に入れない。この二つの別け方をキリストはここでやってらっしゃるわけです。

片一方は業をやっている。御名によつてまで業をやっている。けれども、それは己を求



めている。サタンの手下になっている。けれども、片一方は本当に御意を求めて、

「一生懸命にやりましたが、私は何もできませんでした」

と。キリストは、

「いいよ、お前は天国に入れてやるよ」

と。私はそうだと思う。その祈りとその誠実と砕けの心をもって、神の御意を求めているひと。そこには、生まれつき愛の少ない人がいるよ。けれども、

「私は愛が少ないけれども、何とかして人を愛したい」

とやっている。片一方は生まれつき非常に愛情のある人で、どんどん楽に愛している。しかし、どちらが本当に神の前に価値があるかというところ、

「一生懸命で愛そうとするが、なかなか愛することができない」

と言って泣いている人が天国に入るでしょう。神さまの判断というものは、その人が何を願って、本当にどのようなように自分と戦って行ったか。そういうところを神さまは見る。

そして、求めは、どこまでも人を助け人を愛していくという、この角度の求めです。そして、そこが即ち、キリストの愛の本願にそって生きること。そこには自己がないから、それは本当に勝ちます。そして、喜びの人になる。どんな患難に遭っても、ほほえむ。私はいつか書いたでしょ。女の方がいろいろな苦しみに遭って、泣きたい。けれども、その苦しみや患難の中にながら、ニコニコして微笑んでやっている。こんな姿は、私はそのひとの周りに虹がたつであろうと書いた。

神の国はそのような人たちによって築かれていく。御意の中心は愛すること。キリストの愛をもって愛すること、生命を与えること。せざるを得ない。この生命が来ているんだから。愛が来ているんだから。キリストの愛や生命が来ているのだから、これを分かたざるを得ない。どう思われたって、こっちはニコニコしているというわけです。

天国はその人の周りに、いつも灯火が灯っているように、周りを明るくする。歳の暮れのマッチ売りの少女みたいに、マッチをすると、そこに天国的なものが現れてきた。あの娘は本当にそういうような気持の子だったんでしょ。

●愛が自然になる

そのようなことで、御意を行うということとは、なにも難しいことではなくて、キリストの愛が御意の中心である。それがマタイ伝25章に書いてあるとおり、

「一体、そんなことをしましたか」

と。愛がまた自然になってしまっている。老子が

「大道廢れて仁義あり」

なんて言った。それが本当の大道なんだ。大道が廢れたら、

「仁だ、義だ」



なんて言いだした。

「愛だ、義だ」

とか言いだした。「愛だ、義だ」とかいうのは本当は、まだ本当ではない。大道だ、道だと言う。大道が廃れたものだから、愛とか義とか言つて、間違つた世の中を何とか本当にもつていこうとして叫びざるを得ない。しかしながら、本当に大道が行われてくるならば、愛とか義とか言わなくなつて、それは自然のことになる。即ち、

「いつ、そんなことをしましたか」

という、この人たちの答は、大道にある人の答なんです。キリストという道の中に乗つてしまつていてる人の答なんです。

「右の手の為すことを左の手に知らせるな」

と、イエス・キリストが言われた、その天衣無縫の在り方というものはそういうところですよ。もう、意識の超意識の世界です。それは、キリストの生命が溢れてくれば、すべてが自然になつてくる。第二の自然に——これを天然と言いたい——天然的なものに私たちがなつてくるわけだ。そうになると、何か知らんが、もう永遠の生命を呼吸しているようなことでもあります。

普通の方々は、電車の中なんか見ていると、気の毒になつてしまうね。時々、

「ああ、何とかしてあの人なんか救つてやりたいな」

なんていうのがあるよね。これは、学校ではなかなか、そういうことを言ってくれる先生がいないから。要するに、一番大事なのは、先生と親だ。親と先生の教育が、これは誰もできない。それは自己教育しなければ。自分でそのことに気がついて、そして、それにかかつて行かないことには、日本はいつまでたつてもダメです。

待遇なんか改善したつて、絶対にそれで善くなりません。とんでもないですよ。

「にぎりめしでも食つて、やれ」

くらいに言つた方が反つていいかも知れない。その点で、まだ、私たちの明治・大正の教育の方がよっぽど良かったと思うね。それは間違つていいる面も、封建的な面もあつたかも知れないけれども。

●いつも空気の中に

限りなく、どなたでも、その社会において、その環境において、キリストの御意を為すということ。それは

「キリストの中にあれ」

ということですよ。中になければ、御意は為すことはできない。いくら外側からお伺いを立てたつて、内側にキリストの御意を宿していなければ、

「御意を為す」



なんて言っても、やはり観念に浮いてしまう。
「いつも、中にあれ」
ということですよ。

あなた方は、何の中にいますか。空気の中にいるでしょ。どこへ行つて、空気から離れられるんですか。どこへ行つたつて、この空気から離れるわけにはいかん。牢屋の中に入つても。そして、空気はまた私たちの中に入つてくるでしょ。寝ていても、空気はちゃんと呼吸している。あの人は呼吸しているか。なるほど、いびきをかく人はよく分かる(笑)。けれども、静かに呼吸している。心臓は——どんなスイスの素晴らしい時計でも止まることがある——ところが、心臓が止まったら、その人はお終いだ。人間の心臓という時計は、カッチカッチと止まらない。これが無意識に動いていると同じように。

そして、空気を受けとつて、血が清められて展開していくように。空気を私たちは無意識に吸っている。一番大事なものはお金をひとつも払わないでいただいている空気です。水は、ヨーロッパあたりへ行くと、時にはお金を払わなくてはならないこともあるけれども、空気だけは、どこへ行つてもただです。東京の空気はだいたいぶん汚れてきたけれども。

そのように、私たちには、聖霊の、キリストの霊、神の霊に実は覆われている。いつでも、これは吸わなくてはいかん。聖霊を吸うところの魂の肺臓を動かさないから、魂がおかしくなる。そういうわけですよ。だから、

「どっこい、倒れたと思つたら、あなたの手掌たなごころの中に取りました」

なんて、詩篇に書いてある。そのように、私たちは、どこでもキリストの懐の中に倒れてしまう。キリストの懐の中に。そういう凶太い信仰にならなければダメです。

「なかなか入れません」

なんて、「入れません」ではない。入っていますよ、気がついたら。気がついてくださいよ。気がつくだけです。

● 十字架という狭き門

一番ききに何に気がつくかというところ、十字架に気がついていただかないと。

「ははあ、十字架でもつてもう私はすっかり贖われてしまつていた」

と。自分の過去と現在と未来はどうでもいいよ、そんなものは。もう永遠的に自分はキリストの十字架で——

「ただ一回贖いたまえり」

とヘブル書9章に書いてある——キリストの贖いはもう完了している。過去完了である。それを現在完了として受けとるわけです。常に現在にして受けとる。

そのことに気がついたら、もう十字架で贖われたところは、キリストの聖霊の大气の中にある。十字架という狭き門を通ると、その先は広々とした大宇宙である。聖霊の、詩篇



23篇の「ごとき」。

「緑の野、憩いの水汀」みぎわ

であります。緑の野、憩いの水汀に、もういることに気がつく。

「ああ、私はそこである」と。

だから、今日は三回目は、これは緑の野、憩いの水汀で皆さんと楽しくやっていると。もう、峠は済んでしまった。あなた方、緑が見えませんか、聖霊の水が湧いているではないですか。ヨハネ伝の4章のように。私は空中に上がりそうになるね、時々、気持の上では。だから、重い荷物をしょってないと、危ない(笑)。

そういうところで、本当に人々を喜び楽しませて行こうではないですか。T君たちの集会の、彼らの間の喜びの愛の交わりは素晴らしい。我々はそうではないとは決して言いませんよ。ただ現象面で違うだけの話で、質的には私たちも同じものをいただいています。御霊が来ているところには、現象はどうであろうと、同じことなんです。ただし、本当に御霊が来ていることだけが問題です。

そういうわけで、東京と京都、また、ここにいらつしやる方々と一緒に、キリストの聖霊のあるところにエクレシア、交わりがある。聖霊のないところには、どんなに立派な教会堂があつても、それはキリストのエクレシアではない。このことは、ブルンナーさんが『教会の誤解』という本で徹底的に説いています。

「あれはどうだ、こうだ」

なんて言つて、審いているうちは、いくら聖霊なんて言つたつて、これはダメです。そういう群の方はお気の毒になる。なぜ、もつと開放しで一緒にやろうとしないか。こう思うわけです。

私たちは垣根なんかひとつも持っていない。宇宙が庭みたいなものだ。そういうような具合にして進んで行きます。本当ですよ、私は大言壮語しているのでも何でもありません。突き抜けてしまっている。鯉のぼりみたいに。腹の中を風がスースー通っている。聖霊の風をスースー通して、常に風を、大気を食らっているようなものです。それが本当の元氣なんです。元氣を出せということは、キリストの聖霊という元氣を入れなければ、元氣は出ないんですよ。「元の氣」というのだから、「元氣」とは素晴らしい言葉です。

●キリストの磐

自己を求めないで、神を求め、キリストを求め、そして、その御意を体現するようなことになっていけば、これは本当に磐の上に建てられた家で、どんなことがあつても倒れない。いや実に、その人自身が磐となる。ペテロを捕まえて、キリストは

「お前は磐だ」



と言われた。

「その上に教会を建てる」

と。あれは果たしてキリストが言ったかという問題はあるけれども、どうでもいい。ペテロであろうと、ヨハネであろうと、ヤコブであろうと、パウロであろうと、みんな一人びとりがキリストの磐にされた。私たち一人びとりがキリストに磐にされて、そこに本当のエクレシアが建つていくわけです。

これは「無教会」なんて言うものではない。だから、私は動的な

「幕屋」

という表現を使つたんです。旧約から新約に至るまで、

「聖霊の幕屋」「キリストの幕屋」「神の幕屋」

という、三段構えで歴史的な把握を私はしてまうけれども、そういう在り方、それは

「召団」

と言つてもいい。

「キリストの交わりのあるところは、何もかもこれを切ることができない」

「この愛より我らを離すものが、何ものがあるか」

とパウロがロマ書8章で絶叫している通りです。

そういうようなことで、どうぞ、皆さん、進んで行きましょう。もうはつきりと勝利の戦いがあります。戦いとは敵を倒すことではありません。我々の戦いは敵を救うことです。荷うことです。終わります。

● 祈り

祈ります。

しばらく沈黙して、十字架を瞑想してください。パウロが

「今もなお十字架に架かっていたもう」

と言いました。この20世紀を経るときに、キリストはなお天界に屠られたる羔の如き姿をもつて一面、いらつしゃいます。と同時に、主さまは墓を蹴破つて甦えり、

「我は甦りなり、生命なり。真理の霊を与う、慰めの霊を与う、力の霊を与う、

愛の霊を与う。この聖霊を受けずし、何の生命か」

と仰います。私たちの生きるのは御霊の生命によります。御霊は驚くべき力を持つていらつしゃいます。これは救い上げる愛の力です。このただ一つのもの、これを血となし肉となし、私たちの生命の生命となし、進んで行きます。

電車の中でも、台所でも、書斎でも、職場でも、役所でも、どこにおいても、沈黙の雄叫びをもつて、

「主さまー」



と呼びかけますれば、直ちにその現実に入る。ペテロやヨハネやパウロが

「我を視よ」

と言った。そのように、私たちは叫ばなくても、真に存在そのものをもってキリストを証したくあります。

主さま、どうぞ、そのような証し人として、あなたの手となり足となり口となって、あなたのご栄光を求め、讚美し、いよいよ進ましめてください。この戦いはあなたの御力によって必ず勝つことを信じ、進んで参ります。20世紀は危ないです。しかし、神の国は必ず成つていきます。聖国は私たちの中に來ていますから、あなたの聖国を來させたまえと、心から祈ることが出来ます。御意の天上において成っているごとく、この地上において私たちを通して、どうぞ、自在に成さしめてください。

一人びとりが掛け替えのない、あなたのご栄光の現れとなって参ります。その他のことを考えません。右顧左眄しません。どうぞ、主さま、このようにしてスクラムを組んで、歌いつつ進みます。感謝であります。キリストの御霊と御言によつて、この三回の集會をかくも御導きくださいまして感謝であります。栄光を御名に帰し奉ります。

どうぞ、また、來たるべきクリスマスも、それぞれ本当の、お祭ではなく、いよいよキリストを本当に私たちの中に新たにいよいよ迎え奉り、御名を讚美することが出来ますように、御導きください。

審きの霊があるならば、大和の霊とうち変えてください。主さま、本当につまらんことです。キリスト教界が、カトリックのプロテスタントのなんのかんのと、そんなことではありません。どうぞ、あなたのエクレシアとして、それぞれの在り方で結構ですが、ただ主イエス・キリストの御霊が來たり、そして賜物が自在にそれぞれの器を通して成つてくださるよう

に願ひ奉ります。

何にも私心がありません。あなたのこの御恩寵のゆえです。感謝いたします。ああ、主イエス・キリストさま、私たちの間にかくも突き抜けて、浸透して下さって感謝であります。自分なんかどうでもいいです。そんなものを考えていません。ただ、あなたが現れ給うことを、あなたが働き給うことがうれしくなりません。

御名を讚え奉ります。どうぞ、一人びとりのあなたにつけるところの願ひを聴いてください。聖国が成つてください。

たくさん祈りたきことがございます。どうか、一人びとりの胸にあるところの、その切なる願ひを御名のゆえに聴いてください。イエス・キリストの御名により。アーメン

